
黛敏郎《涅槃交響曲》（1958）の「カンパノロジー・エフェクト」に関する一考察
—日本近代音楽館蔵「Campanology 資料」の検討を中心に

高倉優理子（慶應義塾大学）

本発表は、黛敏郎（1929～1997）の《涅槃交響曲》における「カンパノロジー・エフェクト Campanology-effect」の成立過程に関し、明治学院大学図書館附属日本近代音楽館で新たに発見された「Campanology 資料」の検討を通じて明らかにしようとするものである。

黛は創作活動の全般で梵鐘の音響を素材として用いた作品を残している。オーケストラ作品では、梵鐘の音響分析から得られた倍音列に基づいてオーケストレーションを行うことで梵鐘の音響を作品中に取り込むことを試みた。黛は《涅槃交響曲》初演時のプログラム解説の中で、この手法から得られる効果を「カンパノロジー・エフェクト」と記述している。先行研究では「カンパノロジー・エフェクト」に関して、楽曲分析からの考察は行われてきたが、その成立過程に関する資料に即した研究は行われてこなかった。

「Campanology 資料」は全8点の資料（資料①～⑧）からなるが、発表者は今回の調査で、これらが《涅槃交響曲》、《曼荼羅交響曲》、及び電子音楽作品に関するものであることを確認した。8点のうち《涅槃交響曲》に関わる資料は、資料③、④、⑤、⑧の4点である。資料③は、物理学者である山下敬治の論文「実験音響学」（1948年）から引用された、6種類の梵鐘と3種類の半鐘の倍音の振動数データが記載されたものである。また、黛が東大寺の梵鐘の倍音列に関して平等院のデータを基に推測したことを示す記述や、梵鐘の各倍音の音量の推移を示したグラフ等も書き込まれている。資料④は、「EL[E]KTRONISCHE MUSIK SKALA」と題された、10オクターヴにわたる半音階の各音の振動数が書かれた表を厚紙に印刷したものである。資料⑤は、資料③で山下の論文から引用された梵鐘と半鐘の各倍音の振動数とそれらの平均値を、微分音や「1/4下」等の書き込みを用いて楽譜に書き起こしたものである。資料⑧では、《涅槃交響曲》に登場する十二音音列を半音ずつずらして12通りに記したのが見られる。更にそれぞれの音列について反行形も書き込まれている。

これらの資料の検討を通じて、「カンパノロジー・エフェクト」の成立に関して以下のことが明らかになった。資料③に記された梵鐘の寺の名称が《涅槃交響曲》初演時プログラムの黛による解説の記述と一致することから、《涅槃交響曲》の創作に際して黛が山下の論文「実験音響学」を参照していたことが判明した。また、《涅槃交響曲》の中では、梵鐘を基にした和音は平均律で書かれているが、その前段階として微分音を用いて正確に梵鐘の倍音を書き起こしていたという事実も確認できた。更に、黛の「カンパノロジー・エフェクト」は、山下敬治の論文から梵鐘の倍音列に関するデータを得た上で、それらを資料④の振動数表と照らし合わせ、楽譜に書き起こすという過程を経て成立したものであるということが、資料による裏付けをもって明示できた。発表ではこれらの結果を基に、梵鐘の物理的音響に対する黛の取り組みについて具体的に検証する。